



有吉佐和子さんと玉青さん



市制60周年記念事業

小説「有田川」の世界

望月 良男 × 有吉 玉青

有田市長

大阪芸術大学教授

10月1日(土)、特別展 小説「有田川」の世界の開会式典を開催しました。式典に際し、有吉佐和子氏の長女、有吉玉青氏をお招きし、テープカットを行いました。

特別展では、有吉佐和子氏の直筆の手紙や「有田川」の舞台になった名所の宝物等を展示しています。ぜひお越しください。

■会期／～11月27日(日) ※火曜休館

■開館時間／午前9時30分～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

■場所／郷土資料館(文化福祉センター4階)



市長 特別展開催にあたり、有田市に来ていただき、ありがとうございます。
有吉 市制60年という記念の年に特別展を催してくださり、光栄です。まさに小説の舞台で小説の展示をしていただくというのは、なかなかないことだと思います。おかげさまでありがとうございます。

◆有田市の印象

有吉 一昨年、母の没後30年の節目を迎え、有田市に伺いました。初めて伺った時は、みかんの花の季節で、花の良い香りがまち全体に漂っていて、本当に気持ちよかったです。

その後みかんが実る季節に再び訪れる機会がありました。段々畑は山がみかん色に見えるくらいたわわに実っているんですね。みかんの実がまるでミモザの花のように見える、ああ、素敵なところだなあと思いました。

◆みかん栽培の今昔

有吉 小説に描かれている千代の時代と現在とではみかん栽培は変わってきていますか？

市長 現在は、みかんの産地間競争の中で売り上げや生産高はどんどん伸び、効率化もいぶん進んできています。一方で、小説の中にあるように、千代がみかんの木に名前をつけて、愛しむ、そういう情熱や魂みたいなのは、現在も受け継がれており、有田みかんの歴史とともに有田の強みになっていると思います。

◆「川」への思い

市長 有吉佐和子さんは『有田川』を含む三部作を書かれています。川に対して、特別な思い入れがあるのでしょうか。

有吉 祖母は和歌山で生まれ、その後東京へ嫁ぎました。そして祖父の転勤で、母は幼少期をインドネシアのジャカルタで過ごしています。ジャカルタの川は濁っていて、そこで育った母にとって川とい

うものは茶色いものだったそうです。その後出産のため祖母は母を連れて和歌山へ帰りました。その時母は、そこに流れる川を見て、「川が青い」ってすごく驚いたそうです。幼い母に鮮烈な印象を残した故郷の青い川は、その後『紀ノ川』『有田川』『日高川』に流れることになりました。

◆登場人物のモデル

有吉 『有田川』のなかで、主人公千代の夫、川守貫太は、実在する有田市の初代市長森川仙太さんがモデルとなっていますが、現職の市長としてどのように感じられますか？

市長 貫太は命をかけて、紀勢線の箕島経由を実現させました。箕島に鉄道を迂回させることが和歌山県にとっても日本にとっても利益になるといって、ま

ちの将来を考えながら、一生懸命行動する、そういう生きざまみたいなものに、感服しますね。

有吉 母は家で小説の話はしませんでしたが、川守貫太のモデルのことは長い間知りませんでした。

思えば、私が幼い頃から、和歌山の「森川さん」からいつもみかんを贈っていたのだと思います。また、「森川さん」のお孫さんが甲子園に出たことがあって、祖母と母が夢中になって応援していて、打つと、和歌山弁で「さすがは森川さんの孫やー！」って言って喜んでいました。森川さんが川守貫太のモデルだと知った時、私の記憶のなかで、みかん箱に書かれていたお名前と、甲子園をみて祖母と母が喜んでいただけると、小説『有田川』がすべてつながりました。

◆手紙

市長 特別展をご覧になってのご感想をお聞かせください。

有吉 母の手紙やはがきが展示されていますが、私が物心ついてから母が手紙を書いている姿というのはほとんど記憶がないんですね。今回の展示を見て、若いときにこんなに書いていたのだと驚きました。また、お友達が手紙をとっておい



有吉玉青氏プロフィール

有吉佐和子氏の長女として生まれる。現在、大阪芸術大学教授を務める。小説家・随筆家として活動する他、近年では日本舞踊劇台本、長唄の作詞も手がけるなど幅広く活躍している。